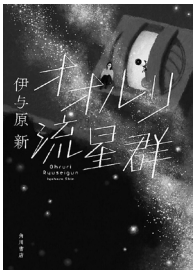

オオルリ流星群

読み物
お薦め度
5
☆☆☆☆☆

伊与原新 著

KADOKAWA，四六判，296頁，定価1,600円＋税

本誌読者においては，自身の研究手法や研究成果がフィクションの題材になると予見できるひとはいるのだろうか．少なくとも私は夢にも思っていなかった．

本書は国立天文台を退職した“スイ子”こと山際彗子が，高校卒業以来28年ぶりに神奈川県秦野市に越してくるところから始まる．スイ子は秦野に手作りで天文台を建て，小口径の望遠鏡を用いた小サイズのカイパーベルト天体による恒星掩蔽モニタ観測を実施しようと画策していた．著者があとがきに明記している通り，これは私が代表として沖縄・宮古島で実施してきたOASESプロジェクト（Arimatsu et al. 2017, 2019）が題材となっている．スイ子は地元で薬局を営む種村久志など，28年ぶりに再会した高校の同級生たちの協力を得ながら天文台を建設するが，これをきっかけに28年前の夏の出来事と対峙することとなる．本書のタイトルにもなっているオオルリは，タペストリーや天文台の名前として，その姿を変えながら本書のマクガフィンとなり，物語の推進力となっている．

本書の著者である作家・伊与原新氏は地球惑星物理学の研究者としてのバックグラウンドを持ち，特に近作（いずれも短編集『月まで三キロ』『八月の銀の雪』）では，科学と接点のない人生を送ってきた人物が期せずして科学に触れることで引き起こされる心のありようの変化を主題とした作品を創出している．本書はこうした近作の流れを受け継ぐ長編フィクションとなっている．本書では特に，著者の持つ高い科学・天文学リテラシーが発揮された演出が多い．本書は2018年の4月から晩秋にかけての物語であるが，作中に登場する惑星の天球上の配列に関する記述は実際の2018年の配列を正確に模している．また本書のメインテーマとなっているカイパーベルト天体による恒星掩蔽観測だけでなく，スイ子の名の由来となった流星群，アマチュア無線電波を用いた流星電波観測などについて，正確に考証されたうえで本書のからくりとして採用されている．こうした気の利いた細部が，本書の物語にリアリティをもたらしている．

登場人物たちの人生は往々にして儘ならない．社会の不条理に晒され傷つき，いなくなってしまった人間について問い続け，多かれ少なかれこんなはずじゃなかったという後悔を抱いている．本書ではこうした儘ならなさは必ずしも明確な解決を見ない．しかし本書はそれでも「歳を重ね」,「物事にはいろんなやり方がある」ことを学びながら，天文学とのふれあいを通して自分の本当の思いや有り様を見つめなおし，「当たり前のように思い込んでいた」常識から少しずつ歩みを進める人々の幸福の追求を肯定する．

私もスイ子と同じく，たった一人でコネクションのない離島に赴き，貧弱な予算で観測プロジェクトを開始したが，それは数多くの困難とやりきれない思いを繰り返しながら，固定概念を少しずつ切り崩していき，自分が自分でいられるやり方を模索していくプロセスにほかならなかった．当事者ゆえの拡大解釈かもしれないが，本書が弊プロジェクトをモチーフにしてくれたこと，そして本書から弊プロジェクトと通底する眼差しを感じ取ることができたのは望外の僥倖である．

有松　亘（京都大学白眉センター）